6　田掻き地蔵伝説

九郎右衛門家は滝夜叉姫に付いて来た平家の落ち武者として、この中生保内に落ち着き、茨を伐り開き、先祖代々百姓として暮らしていた。しかし、山が近いため湿地の田ばかりで、田んぼへ入ると腰まで浸るような所が多かった。五月の晴れた日、九郎右衛門は田掻きをしようとしたが、あいにく妻は他に仕事があり、馬のサセを取る(馬を誘導すること)ものがいなかった。そこでとりあえず子供にサセを取らせたところ、湿地と不整形な田のため、子供は腹までも泥の中に浸かり、馬を引くどころか馬に引かれて歩くようなありさまだった。九郎右衛門は、子供を叱り付け歩かせようとしたが、身動きさえ自由にならない田の中で子供はおろおろするばかりだった。そこへどこから来たのか見知らぬ若者が現れ、子供を怒鳴り付けている九郎右衛門に「私が竿を取ってやろう」と言って田に入り、子供の代わりに馬のサセを取って田掻きを始めた。若者の馬の操り方は上手で、瞬く間にぬかるみの田を掻き上げた。馬を田から上げた九郎右衛門が礼を言おうとして若者の今までいたところを見ると若者の姿は消えて、ただ泥に濡れた足跡だけが残っていた。あまりの不思議に九郎右衛門は泥が点々と付く若者の足跡を辿って行って見たところ、その足跡は氏神の延命地蔵堂の中へ入っていた。不思議に思って戸を開けて見ると、地蔵様の足が泥まみれになっていた。九郎右衛門に叱られる子供の難儀を見かねた地蔵様が、子供の代わりに馬のサセを取ってくれたことを悟った九郎右衛門はその罪を詫び、あらためてお礼詣りをし、地蔵様が馬のサセを取り田掻きをした田を地蔵田と名づけたという。

この話は、中生保内に伝わっているものである。